

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：33910

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23653185

研究課題名（和文）家事の動機づけのメカニズム

研究課題名（英文）Mechanism of motivation for housekeeping

研究代表者

速水 敏彦 (HAYAMIZU TOSHIHIKO)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：20116172

研究成果の概要（和文）：家事の動機づけを測定する項目を収集し質問紙を構成し、成人女性に実施して因子分析を行った。その結果、興味関心・効力感、義務感、生活習慣、生活必要感、代替者不在感の5つの因子が抽出された。また、各家事の動機づけが現実の家事行動とどのように関係するのか、さらに専業主婦と就業者では動機づけに違いがあるのかについても検討した。さらに家事の動機づけの高低を規定するパーソナリティや価値観、家族の人間関係との関連についても調べた。

研究成果の概要（英文）：At first, we gathered the reason why people do housekeeping. The questionnaire measuring motivation for housekeeping was constructed and administered to about 1000 women. Using factor analysis, we found five reasons for motivating housekeeping: interest and efficacy, feeling of duty, custom for daily life, necessity for life and no substitute person. Next, the relation between motivation and behavior for housekeeping was examined. Furthermore, it was investigated how actor's personality, value and human relations determine motivation for housekeeping.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：家事、動機づけ、習慣

1. 研究開始当初の背景

これまでの動機づけ研究は学習や仕事の動機づけなど生産的な行動を伴うものに限定されていたが、我々の日常生活には家事の動機づけのようないわばプラスマイナスゼロの動機づけもあることに気づいた。つまり、一定の時間経過に伴い、必ずしなければならないが、やったからといって報酬が得られるわけではなく、終了したと思ってもまた、同じことを繰り返す行動がある。これらは消極的、習慣的になされる行動の背景にある動機づけであるが実は日常生活にはそれに類した動機づけが少なくない。家で行われる子育て

や介護にもそれに似た動機づけが働いているとみることができる。そして、さらにいえば、生徒の学習動機づけや成人の仕事の動機づけも日常化すると習慣化する。つまり、あまり意識することなく、勝手にいつもの時間がくれば机に向かったり仕事に専念したりする。だとすると、これまでの主流の動機づけ理論は認知的動機づけ理論と呼ばれ、認知が動機づけを規定する枠組みで研究がなされてきたが、認知自体あまり機能しない動機づけも多いことになろう。日常的にはそのような無意識的行動が多いことをこれまでの多くの動機づけ研究者はあまり気づいて

いないように思われる。そこで、そのような習慣的行動の動機づけの一つとして家事の動機づけを検討することは意義のあることだと考えた。このような観点を筆者は数年前から持っており名古屋大学での授業などでもとりあげてきた。また、2012年3月にはナカニシヤ出版より「感情的動機づけ理論の展開—やる気の素顔」を上梓したが、そこでも「日常生活に埋もれたやる気」として紹介した。そこでは人間の行動の中には図と地とでもいえるものがあり、人の中核的目標に関連したものが図の行動であるが、その他の毎日比較的同じように繰り返される行動は地の行動であり、後者のような行動の動機づけ研究が忘れられていることを指摘した。さらにいえば、習慣的動機づけは、認知よりも感情とか価値とかいったものが動機づけに影響していると予想している。

2. 研究の目的

- (1) 面接による家事の動機づけ項目の収集: まず、炊事、掃除、洗濯などの家事を行うにはどのような動機づけが働いているかを直接尋ねて明らかにする。
- (2) 先に収集したものを整理して家事の動機づけ尺度を構成する
- (3) 家事の動機づけの高低を規定する要因について検討する。

3. 研究の方法

- (1) 主に主婦を対象にして30分程度の面接を実施して炊事、掃除、洗濯をする際の動機づけについて尋ねた。
- (2) 面接でえた情報を中心に家事の動機づけを測定する項目を作成した。なぜ家事をやるのかの理由を項目として5段階（どんな時もある、めったにある、めったにない、めったにない、めったにない、めったにない、めったにない、めったにない、めったにない、めったにない）で答えを求めた。それを20代から50代までの1000名近くの女性を対象に実施した。
- (3) 家事の動機づけを規定すると考えられるさまざまな要因についても尋ねる質問紙を作成し動機づけの質問紙と同時に実施した。その内容はパーソナリティを測定するTen Item Personality Inventory、生活への価値づけ（家庭、余暇活動、職場、習い事、友人関係のそれぞれについてどの程度重視しているかを評定）、平等主義的性役割観、家族からの家事に関するフィードバック、夫婦・家族関係満足度、家族と自身の家事行動量、主観的幸福感などである。Ten Item Personality Inventoryは有名なBig Fiveの短縮版であり外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの特性を測定してい

る。10項目5段階評定で尋ねている。生活への価値づけについては、以下のそれぞれの生活の領域について、あなた自身はどの程度重視していますか、「全く重視していない」を0、「非常に重視している」を6としてあてはまる数字に○印を付けてください、という教示の下、家族、余暇活動、職場、習い事、友人関係の5領域について7段階評定を求めたものである。

平等的性役割観については「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」「主婦が働くと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはいりやすい」など15項目に「ぜんぜんそう思わない」から「まったくそのとおりだと思う」までの5段階で答えさせるものである。家族からのフィードバックに関しては「家事をしたことについて、家族は感謝してくれる」「～家族から不満を言われる」「～家族は喜んでくれる」「～家族は無反応である」「～家族からお礼を言われる」の5項目について「全くない」から「よくある」までの4段階で評定するものである。夫婦・家族関係満足度については夫（妻）との関係についてと家族との関係について以下の類似の6項目で尋ねた。「私たちは、申し分のない結婚生活を送っている」「私と夫（妻）の関係は、非常に安定している」「私たちの夫婦関係は、強固である」「夫（妻）との関係によって、私は幸福である」「私はまるで自分と夫（妻）が同じチームの一員のように感じている」「私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると幸福だと思う」家族と自身の家事行動量に関しては炊事、洗濯、掃除、育児の4種類にわけ自分自身と家族に関してそれぞれに「ほとんどやっていない」から「ほぼ全てやっている」までの5段階で尋ねた。そしてここでは育児については整理集計の際、除外した。主観的幸福感については「あなたは人生が面白いと思いますか」など15項目からなる既成の尺度を使用した。

4. 研究成果

- (1) 面接は質問項目の抽出だけでなく、家事の動機づけの過程についても調べたがそれは『家事のとらえ方』に関する調査の報告書として小冊子にまとめた。その面接の結果としてたとえば、食事の準備を終えたときに多くの人が安堵感や達成感を感じていたが、次の食事の準備にとりかかる前の気持ちとしてはまた「めんどうだ」という気持ちになることが多く、まさにプラスマイナスゼロの仕事であることがわかった。そして、家事での達成

感はその場限りのもので決して持続するものでないことが理解できる。

質問項目は何度か整理しなおしたが、本科研の最終段階では67項目に絞り、因子分析を行った。その結果5因子が抽出され、興味関心・効力感、義務感、生活習慣、生活必要感、代替者不在感と命名された。興味関心・効力感の項目としては「やるのが楽しいから」「家事に関心があるから」「達成感がえられるから」「家事をすることに誇りを感じているから」など22項目、義務感の項目として「家族に嫌われたくないから」「やらないと誰かから何か言われそうだから」「やらないと恥だから」など15項目、生活習慣は「やるのが習慣だから」「あまり考えずに自然と手が出るから」「気づいたらやり始めているから」など7項目、生活必要感は「健康に生きるため大事なことから」「生きるためにはやらねばならないことだから」「やらねば生活ができないから」の3項目、代替者不在感は「誰もやってくれないから」「代わってくれる人がいないから」「やるのは私しかないから」など5項目であった。

5つの動機づけの高さは生活必要感が最も高く、次いで生活習慣、代替者不在感、興味関心・効力感、義務感の順であった。動機づけの高さと行動の強さが対応することが動機づけ尺度の妥当性として期待されるのでどれほど自分で炊事、掃除、洗濯をしているかの行動との関係を見たところ、中程度の相関が見られた。しかし、相対的には義務感での動機づけの高さと家事行動量との相関は低かった。一方、家族の家事行動量との関連については特に代替者不在感の動機づけとは強い負の関係が、生活習慣や生活必要感とも有意な負の関係が見られた。本人がそれらの動機づけが高い場合には家族はほとんど家事に従事していないことになる。

- (2) これまでに家事の動機づけに関連する要因として検討されたものに①年齢との関係がある。そこでは40代で家事の動機づけが総じて下がること示された。この傾向は民間の調査の家事を負担に思う人が40代で増大するという結果と一致する。40代は子どもも小中学生になり、対立することも多くなり、仕事をもつ人にとっては責任ある地位に付くところで心労が重なり家事がどうしてもおろそかになることと関係があろう。②就業者と専業主婦との比較では専業主婦の方がどの動機づけも高かった。③パーソナリティとの関係では協調性が高いほど興味関心・効力感、生活習慣、生

活必要感の動機づけが高かった。また、家庭や職場に価値を置くほど家事の動機づけが高く、余暇活動に価値を置くほど家事の動機づけが低かった。特に家庭生活への価値づけの高さと生活習慣の動機づけの結びつきは強かったが、これは家庭を大切に思っている人ほど、何も考えることなく自然に家事に従事していることになる。その意味では生活習慣の動機づけは外発的動機づけの中でも自律性の高い動機づけと考えるとよい。実は夫婦関係満足度や家族関係満足度も生活習慣の動機づけは有意な関係を示しており、家庭での雰囲気が良いと無意識的に家事に動機づけられるものと考えられる。家族からの肯定的なフィードバックとの関係については興味関心・効力感の動機づけのみと有意な関係が見られた。家事をそのような内発的動機づけで行う人たちは家族から肯定的フィードバックを受けていることになる。また、平等主義的性役割観をもつほど特に興味関心・効力感と義務感による家事の動機づけは低いことがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計7件)

- ①小平英志・速水敏彦・青木直子 家事の動機づけ(6)―家族との関係性が動機づけに与える影響― 日本心理学会第77回大会 2013年9月19~21日 札幌コンベンションセンター 発表確定
- ②青木直子・速水敏彦・小平英志 家事の動機づけ(7)―主観的ウェルビーイングとの関連に注目して― 日本心理学会第77回大会 2013年9月19~21日 札幌コンベンションセンター 発表確定
- ③速水敏彦・小平英志 家事の動機づけ(4)―家事の動機づけの種類とデモグラフィック変数に注目して― 東海心理学会第62回大会 2013年6月1日 静岡大学
- ④小平英志・速水敏彦 家事の動機づけ(5)―パーソナリティ、生活への価値づけ、性役割観の影響― 東海心理学会第62回大会 2013年6月1日 静岡大学
- ⑤速水敏彦・青木直子・小平英志 家事の動機づけ(2)―炊事に取り組む前・作業中・作業後の感情の変化― 日本心理学会第76回大会 2012年9月12日 専修大学
- ⑥青木直子・小平英志・速水敏彦 家事の動機づけ(3)―炊事に取り組む前・作業中・作業後の認知の変化― 日本心理学会第76回大会 2012年9月12日 専修大学

⑦青木直子・小平英志・速水敏彦 家事の動
機づけ 日本心理学会第75回大会 2011
年9月17日 日本大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

速水 敏彦 (HAYAMIZU TOSHIHIKO)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：20116172

(2) 研究分担者

小平 英志 (KODAIRA HIDESHI)

日本福祉大学・子ども発達学部・准教授

研究者番号：00442228

青木 直子 (AOKI NAOKO)

藤女子大学・人間生活学部・講師

研究者番号：20453251